
GONTZ -ゴンツ-

サトウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GANTZ - ガンツ -

【ZPDF】

Z2224D

【作者名】

サトウ

【あらすじ】

小説、海外ドラマとパクリさせて頂きました、パクリ小説シリーズ。
第3弾は漫画「GANTZ ガンツ」です。

第1話「クラリティ・クオリティ」（前書き）

一応3部作つつうわけで。「野ザル。」をプロデュース、「トオル・ゴーリング」を見てから読んでいただければ幸いです。

第1話「クラリティ・クオリティ」

俺の名前は素野計。^{しののけい} 16才。^{ふうりんぐるすじゅうじつ} 風鈴具流須高校の1年だ。

わけあって両親と離れて暮らしている。家賃4万7000円のボロアパートから学校に通う日々。平凡な高校生。悩みもそれなりにある。

以下の悩みは2つ。ひとつめは隣りの部屋の騒音。1週間に1回ぐらい夜中の1~2時にいきなり人の話し声。叫び声に近い声や、なにやら大きな物音も聞こえる。その後静かになり、また朝方3時4時に部屋を大人数が出て行く気配。これで目が覚めことがある。

不思議なのは部屋に入る気配が全くしないことだ。いつも10人ぐらい部屋から出て行く感じなのに、12時前には人が入っていく気配はない。いきなり部屋で声が聞こえて「またか」となるのだ。

なにかしらの霊現象か、変な集会か、それともいかがわしいパーティーでもやっているのか。耳をすまして会話を聞くとするが、

「なにこれ」

「なんだよ。これ」

「死んだよね」

と全くわけがわからない。

大家に言つ事もできるだろうが。なんかめんどくさい。そう俺は「なんでもめんどくさい」という世代」なのだ。

隣りで何が起つようと関係ない。そんなの関係ねえってのが巷で流行っているが。

もつひとつの歯みつてのは、「恋」だ。それも片思い。もつ相撲に一方的な。

相手は同じ高校の3年生「田所葉理子」。

彼女を初めて見たのは文化祭のイベント「ミス・フウリングルス高校」で優勝したときだつた。なんでも彼女は1年のときに3位。2年生で準優勝、そして今年の3年でようやく念願の優勝を果たしたらしい。学校行事には、とんと興味がない俺は誰にも投票しなかつたが候補者ポスターを真剣にみていれば迷わず彼女に投票していただろう。もつともその名前は噂には聞いていた。友達が少ない俺でも、クラスの話題にはなんとかついていってるし、その中に彼女がカワイイという噂もあつた。

だが初めてみたときには衝撃を受けた。もう俺のドジボ。今のことろ遠くから見つめるだけで十分なのだが。

そう。今みたいに帰り道に後ろからついていくぐらいで十分なのだ。

えつ。ストーカー？ 違う違う。たまたま帰り道が一緒なだけだ。俺がやることは計算して下校時間を合わせるだけだ。

やっぱリストーカーだつて？ まあ、そう言われてもしようがない。

しかし、さすがに家まではついていかない。俺のアパートは学校の近くだし。

自分の部屋に入る前にその後ろ姿をそつと見つめながら「さよなら」と、心の中でつぶやくのが日課だ。

おお、純情少年だ。えつキモイつて？ まあそう言われてもしようが

ない。か。部屋に入るビデカツと座り、すぐに万年床に横になる。

「なんとかお近づきになれねえかな」

独り言をつぶやく。

「部屋、そろそろ掃除しねえとな。来週オカンが様子見にくるわつ
つてたし」

周りには『』が入ったコンビニの袋だらけだ。

「やつぱめんぢくせえ」

「そう。しつこよつだが俺は「なんでもめんぢくせえことこの世代」
なのだ。

「だいたい、なんだよ、その世代は・・・」

自分にツッコミながら、いつのまにか寝てしまつたよつだ。時計を見ると夜の11時半。ヤバイ。これは隣りの騒音とか関係なく、夜中に寝れなくて朝方寝て遅刻。というパターンになりかねない。しかし、腹は減つていた。近くのコンビニでも行くか。と帰宅したときの制服のままアパートを出た。外は恐ろしく肌寒い。小走りになりながらコンビニへ向かつ。コンビニの自動ドアが開いても、一瞬俺は中に入れなかつた。

雑誌「一ナーハイ」で立ち読みをしている女の子に目が釘付けになつたのだ。

タドコロハリコがいる。上下スウェットといつラフな格好で。

(うわー。やつぱり家、この辺なのかな。スッピンでもカワイイなあ。スウェットとはいえ初めて私服みたよお)

といろいろ思いながら、チラ見しつつ。弁当コーナーへ行く。数も少ないし、あるヤツも食べ飽きたものばかりだが、どうでもよかつた。飲み物も適当に選んでレジへ急ぐ。

(なんか話しかけるか。これはチャンスだ。でもなんて?)

お釣りを受け取りながら雑誌コーナーを見る。もう彼女の姿はなかった。

「ヤベ」

慌てて店を出る。彼女の後姿を見つけた。思いのほか遠くにある。

(あの方向だと、大通りの向い側に住んでるのかな。オシャレな住宅街があるし)

「こいつでくると妄想では収まらない。好奇心が勝つ。俺は彼女を追いかけた。読者の皆はドンピキしてると思いつつも。だがこれから起ることを考えれば、俺の選択は正しかった。

彼女に追いついたときすでに大通りの横断歩道を渡るところだった。彼女はヘッドフォンで音楽を聴いているようだ。信号は赤。

(おこおこ信号無視かよ)

俺はおいかけて渡ろうとした。が、彼女に向かつてものすごいスピードで近づくトライックに気がついた。

「おいおい。マジかよ」

彼女は気がついていない。「のままでは……。

(うわー。じうこいつときめことスローモーションだ)

そんなことを思つて俺は飛び出した。

「危ない！」

彼女を突き飛ばそうとしたときだった。

「マジ…かよ…」
「ひきづられなかっただけマシなのかな…」

全身が痛かった。何が起ったのか。上をトラックが通り越したのか。気が付けば彼女を抱きかかるように、俺は倒れていた。

キキーとブレーキ音と共に車が何かにぶつかる音がした。

数十メートル先の電柱にぶつかってトラックは止まっていた。

意識が遠のく。

「嘘だろ。俺、死ぬのかな」

彼女を見る。意識はないようだ。

「せっかく、こんなに近くにいるの…」
せめて彼女を助けたかった。

俺は田を閉じた。まさに今日、家に帰つて寝つ転がつたときのよう

目が覚めた。生きていたのか。「ここはどこだ。病院じゃねえな。だつてまだ田の前に彼女はいる。まだ抱きかかえる感じで。すぐそばに」。

床には畳の感触。室内であることは間違いない。

「おーい。また出でたよ」

声が聞こえた。ゆっくり起き上がる。

「あれ。ここ」

見慣れた部屋だった。間取りが自分の部屋と同じだからだ。しかし、自分の部屋とは全然違う。家具はまったくないし。キレイだ。

それに、部屋のど真ん中にバカデカイ、玉があつた。そして周りを取り囲むように人間が数人立っていた。

「たま」「ってなんだよ。と思われるかもしれないが、まさにその表現しかないのだ。直径2メートルはあるだろうか。光沢を持った真っ白い玉が部屋を占領していたのだ。

「なにこれ? どうきり?」

つぶやくと、20代ぐらいのキャラキャラした男が話かけてきた。

「俺たちもわからんなんだよねえ」

後ろには仲間らしき男が3人いた。他の人間もサラつとみる。

60代ぐらいの男。40代の主婦っぽいおばさん。若いカップル。

スーツ姿の比較的若めのサラリーマン。

そして部屋の隅に突っ立ったままの学ランの少年。中学生か？幼さの中にもキリっとした眉が大人びた印象を持たせる。見覚えがあつたが、思い出せない。

俺たちも含めて12人。か。

「あれ、これウチラが行つてた高校の制服じゃん。フウリングルスでしょ」

「はあ」

「まだ寝てるこの子は彼女？」

「いえ、違いますけど・・・」

「あれ、この子、確か、」

「やつぱり君も死にかけたのかい」
サラリーマンが話しかけてきた。

「えつ死にかけ？」

「そう。ここにいるみんなは死を目前にしてここに集まってるんだ、私は、誤って駅のホームに落ちて、電車が目の前にきて・・・。その若い口立ちはドライブ中に事故に。おじいさんは病院で・・・。そこのおばさんも車の事故。そういうえば君は聞いてなかつたな」

中学生に話しかける。

彼はゆっくりと口を開く。

「そんなんどうでもいいっしょ。つたくロクな人間集めねえな。ゴンツは

集める？ゴンツ？なんだいつたい。俺は窓の外に目を向けた。

「まさか

俺は急いで窓際に向かった。真ん中の玉の脇をなんとかすりぬけて。

「ダメだって。窓も開かない。玄関も開かないよお
チヤラ男の一人がいっ。

俺は確認したいことがあった。隣りのベランダだ。

「マジかよ」

干しつばなしの洗濯物はあきらかに自分のものだった。

第2話「トレイン・トレイン」

「マジかよ・・・」

この「トカイ」「王」のある部屋は自分の部屋の隣りだった。携帯の時計を見る。

12時。やつぱつ。俺は今から、あの騒音の正体の真相を知る」とになるのだ。

「わけわかんない。といいつつ、これガントなんだよなあ」

最初に話かけてきたキャラ男、そうだな。キャラ男1とでもしておぐか。が言った。

「だよなあ。お前たちにあるやつ全部読んでるし」

キャラ男2が囁く。

「なに、なにそのガントって
「聞いたことあんだけど・・・」

キャラ男3、4が続ける。雰囲気からして、1、2がリーダー格っぽい。

中学生を見る。さつきのキャラ男たちの会話を鼻で笑ってるよつだ。

「ん。ん~」

タダ口口ハリ口が起きたよつだ。

「だ、大丈夫ですか」

おさるおさる話しかける。

「えつ、こじどこ？」

目を開けて回りを見渡す彼女。

「確か・・・」

「そう。トラックにはねられて・・・。俺助けよつとしたんすけど」「ありがとう、助けてくれたの・・・ね」

「いや、助けられなくて・・・。俺も一緒に」

「じゃあ、なんでここに・・・どこも痛くないし」

「俺もわかんない」

見守っていた、チャラ男たちが話しかけてきた。

「ねえ、確か、ハリコちゃんじやねえ？」

チャラ男1。

「は、はい」

「ほら高1のときオソニヨウジとつきあつてるって噂あつたよね」

チャラ男2。

「覚えてないかあ。俺たち2人オソニヨウジのダチン」でさ。あつ。こっちの2人は大学の友達。チフスター地府星大学なんだけどさ。ひがしがどそいぢ東門総一だよ

「はあ」

「俺は矢作明男」やはぎあきお

「はい・・・・一応。知つてますよ。有名だったし」

「一応とか言われてるぜ。お前ら高校時代」4で有名だったんだろ」

「4・・・。俺も聞いたことがある。確か、俺が入学する2年前には存在していた金持ち4人組。まあ、花より男子のパクリだ。とうとう残り2人が出てきたってわけだ。なんで俺がそんなことを知っているのかは・・・・どうでもいいことだ。」

「うつせえな」

チャラ男1・・・ヒガシカドが言つ。

「まあまあいいじゃん。あいかわらずカワイイね。ハリコちゃん」

チャラ男2・・・ヤハギがなだめつづ。タドロロハリコにやらしく笑いかける。

クソ。馴れ馴れしい。

「それよりこの玉なんだよな」

俺は思い出していた。

「そうえば、ガンツつて」

「そつそつ。マンガなんだけどさ。マンションに黒い玉があつて、音楽が流れてくるんだ」

といった瞬間、白い玉から、なにやら音楽が流れてきた。

「これつて

「やつべ。やっぱガンツじゃん。みんなみてみりょ。これから白い玉になんかでぐるつて」

いまだ隠にいる中学生を除くみんなが玉の前に集まる。

玉の表面の一部がテレビ画面のように変わつて、なにか文字が浮かび始めた。

「YOHたちは死にました。死んだ命をMEが勝手に使つてもいいよね

これからコトバツをやつつけにいつちやこなよ」

「な、なんだよ」

「だからあ。ほら、また画面変わった」

画面に七三分けのおっさんが出てきた。横に文字。

「トランス星人？本人弱いけど武器が強いよ。口癖『とらんす・ふお～む』『ギゴガゴギゴ』だつてや」

「うわーやつぱガンツだよ。これから俺たちゴイイツ倒しこいくんだ」
ヒガシカドが言った。
みんなキョトンとしていた。

「おじおじ、それはマンガだろ。俺だつてガンツ読んでるけビ」
は現実なんだぜ」

小説だよ。ヒツツ「ミミたかつたが止めておこひ。主人公でも言つち
やあいけない。

「でも、ここの状況は明らかにそつだろー今から、この白い玉の扉が
開いて・・・」

プシューという音とともに白い玉の扉・があつたようだ・が開く。
両側から。上に向かつて。
いわゆるガルティングといつヤツだ。

「こには違うんだな」

「テロリアンみてえ」

扉にはいくつも白い金属製のステッケースがぶらさがっている。

「ほり、ここのケース。たぶん名前。あだ名で書いてあるやつもって

けよ

ヒガシカドがスーツケースを取りはじめた。

俺は玉の中を覗き込む。驚いた。全裸のおっさんがなにやらホースで繋がれて、目を閉じている。

「ねえ、この人」

俺はヒガシカドではなく、中学生に声をかけてみた。直感で彼の方がこの世界に詳しい。と俺は判断していた。

「ああ、知らないや。ま、今から来ればわかる」

「はあ～ど二行くんだよ
先行くよ」

彼の頭がなくなっていた。

えつ。上から順番に消えていく。

手には銃みたいなヤツを持っていた。

銃！？な、なんで。ふと扉を見ると中学生のヤツが持つてたものと同じようなものがぶらさがっている。

「おいつやつぱ転送始まつたぞ

「マジかよー」

ヒガシカドとヤハギの声。

転送？なんだよ。それ。俺は銃をつかんだ。するともう景色が変わっていた。

外にいる。周りを見渡すと中学生以外はまだいた。

ハリコさんは「ここので急にさん付けになるのはこの際、置いておこう。

彼女は怯えるように、うずくまっていた。

「大丈夫ですか？ ハリコさん」

「う、うん。ホントわけわかんない」

カップブルも、サラリーマンも主婦もおじいさんも、ボーッとしていた。

「なにこれ」

「なんだよ」

「ここ、目九張めくぱりじゃないか？」

メクハリ？ 隣りの県じじゃないか？ 一瞬でこんなところまで。俺は目の前に建つドーム状の建物をみつめた。

「これ、メクハリメッセか・・・」

俺はつぶやいた。

「おいお前ら、早く着替えるよ」

「つかスースケース持つて来たの俺たちだけじゃねえ？」

ヒガシカドとヤハギはスースケースからなにやら取り出していた。白い全身タイツのような。少しほはスタイルッシュだが。間接部分にサポートのようにプロテクターがついている。

「なんか白だとかつこつかねえな」

「しょうがねえだろ、こつちはこういう設定なんだし。死にたくないだろ」「

死？俺たち死んだんじゃ・・・。2人は周りを気にせず、着替えていた。

ブーッブーッブーッ。変なブザー音が聞こえてきた。

「なんだよこれ。お前の着メロか？」

「ちげーよ」

声も聞こえた。

その方向を見るといつの中にチャラ男3と4がメクハリメッセの敷地内から出ようとしていた。

「バツ、バカ、そつち行くな」
ヒガシカドが慌てる。なんでだ。

「えーつ何、聞こえねえ」

ブザー音が次第に大きくなつた。

「だつからつ、戻つて来い」

「え？とにかく駅の方まで行くよ」

今度はヤハギが何か言おつとしたが、チャラ男3と4の足は完全に敷地外に出ていた。

「ボン」大きな音がした。瞬間2人の頭がふつとんで、体は倒れこんだ。

「キャア」

「うわ」

皆、次々、と叫ぶ。

「くつそお。ガンツと一緒にだ」

「ひりや、マジでやべえな」

2人は着替え終わっている。手には銃を持っていた。

「おい、お前らそこにいろよ。ここにだまつていればたぶん大丈夫だ。0点でもあの部屋に戻れる」

0点。なんじやそら。

「確か、今、東京スーパークリーニングへつてんだよな」

「ああー。俺、行きたかったんだよなあ」

「よかつたじやん。来れて」

「おいおい。こんな状況で来てもなあ

「キヤンギヤルもいなだらうし」

2人はメクハリメッセに向かって歩き始めていた。

俺は何がなにやらわからず立ちすくんでいた。
ハリコさんは横で座りこんで震えていた。

カップルは寄り添つて。

サラリーマンも座り込み。

主婦は一言も発していないが、疲れた様子だ。

60代のおじいちゃんは・・・何か考えているようだ。

作者は登場人物出しそぎたか。と少し後悔していた。

第3話「セフン・ティーズ・ワンダー」

「マジかよ・・・」

さつきから、こればっかり言つてる気もあるが、無理もない。あまりにも異常な状況だ。

死んだと思つたら自分ん家の隣りの部屋にいて、そつから飛ばされて、数メートル先には頭がない死体が2つ。

「ありえねえつーの」

俺は手に持つてゐる銃をみつめた。

無我夢中で掘んだようなもんだ。SF映画に出てくるみたいな。トリガーが2つ。後ろにモニター画面。ダイヤルが0～5。スイッチが何個か。

「なんだこれ。使えるのか」

ふとメクハリメツセの方を見ると、ヒガシカドソウイチとヤハギアキオが入り口から入るところだった。

俺は決心した。

「ハリ」「セス」

「えつ」

「あなたは」「こころてくれ。みんなも」

俺はその場にいる人たちを見渡した。

あの中学生はいない。こうなると、あの2人を追いかけなければ状況は掴めない。

あの変なスーツはないが武器らしきものがある。

それを使えるか。使う相手がいるのかもわからぬが。

「あの」

ハリコさんが話しかけた。止めてくれるのかに。そばにいて欲しいのかい？

「なんで私の名前知ってるんですか？」

思わずガクツとなりそうだったが、それではコントになるのでなんとか自分を抑えた。

「そりゃあ、今年度のミス・フウリングルスの女の子の名前を知らないわけないじゃん」

「あつ」

ハリコさんは俺のコレコレになつたブレザーを見つめた。

「カワいい

思わず声が出そうになつたが、これまた自分を抑えた。

「えじゅ、じじじじじ

俺は走り出していた。

入り口までくると、俺は扉を見上げた。

「中央ホール入り口」とある。

ガラス張りの部分から中の様子を伺う。

警備員はいない。すんなり扉は開けることができた。

こんな手薄でいいのか。

その奥にもうひとつ扉があり、そこからホールへ行けるようだ。

意味もなく銃を顔の横に構える。

2つ目の扉を開けた瞬間、ものすごい勢いで体を壁にたたきつけられる。

押さえ込まれて銃口が頭に押し付けられるのを感じた。が、すぐに離された。

「なんだおまえか」

ヤハギだった。

「おいおい。あそこにいるついたる物陰からヒガシカドが出てきた。

「いや、なんか俺も手伝えるかなと思つて」
俺は銃を見せた。

「無理だつて、お前スースないじやん
ヒガシカドはあたりの様子を伺いながら言つた。

「だから、そのスースとか、ガンツとかわけわからんないんすよ」

「まあ、俺たちの今の状況は漫画ガンツに似てるつてわけだ」

「銃がちょっと違つんだよなあ。俺たちにもぶつちやけ使い方がわ

かんねえ」

「それに、あんたら・・・」

「ん。なんだ？」

「友達が死んだつてのに平氣そつだつた」

「それはまあ、そこまで仲良かつたわけじゃないし・・・いざとなつたら」

「?」

「100点取つたら生き返らせられるかも」

ヤハギが言った。

「まあ、100点取つても、あんなヤツら生き返りせないけどな」

「うわ。お前ひでえ」

「それにそこまでガソツと一緒に限らねえだら」

「あの100点とかわつきも〇点つて・・・」

「ああ、今から俺らはおそらく星人と呼ばれるやつらを倒さなきゃいけない。あの玉つじに映つてたヤツいただろ。七三のねつせん」

「え、ええ」

「あいつがこの中にいるはずなんだ」

ヒガシカドは手元を見ていた。携帯電話ぐらいの大きさでスースに収納されていたようだつた。ヒガシカドはそれを俺の方に向けた。

「ほらここの地図。赤い線で囲まれてるだろ。これがこのゲームのエリアだ。こつから出るとアイツらみたいになる。でこれでズームと。今中央ホール。西ホールに反応があるみたいだ。でこれから俺たちはここに向かおうと思つてたわけ」

「そんで倒したら点数もらえるわけ。それが100点になると」

ヤハギが続けた。

「なると？」

「俺たちはこのゲームから抜け出せるつてわけだ」

「本当すか？」

「これはガソツじゃないし。この作品の作者がそこまでパクつてくれてるといいんだが」

おいおい。そういうセリフは主人公だけに言わせてくれ。

「とりあえず、進もう。中央ホールから西ホールに行けるはずだ。
ついてこいよ」

ヒガシカドが促した。

メッセ内に完全に入ると、そこはさつき2人が話していたように、
東京スーパークーラーショーが開催されていた。といつても真夜中な
で誰もいない、格扉の上の非常灯の明かりでぼんやり、車がたくさん
並んでいるのがわかる。

「暗闇に目が慣れなきやな」

「これたぶんライト機能あるぜ」

「いや、ここには目立たない方がいい」

俺と2人は中央ホールの真ん中あたりまで辿りついた。

「うわっこノツサンのブースじやん。これJT-Rじゃね
やつぱり、かつこいいな」

こんなときになんて会話してんだ。と思いつつも。俺もノツサンと
いうメーカーが出したJT-Rの最新モデルの美しいフォルムを見
とれた。暗い中で浮かびあがる銀色のボディはなかなかのものだ。

「よし、暗闇にも慣れた」

俺は慌ててヒガシカドをみた。

「おまえはここにいる、JT-Rの前」

「えつ」

「だからステッキないからとりあえずここだ。俺たちはレーダーが反
応する西ホールに向かう

「ちょ、ちょっと待つてよ

「いいから、これ取り外せるよな。ほらこれ、渡しておくれ。なんかあつたらすぐ逃げるよ」

ヒガシカドは俺に先ほどの機械を渡した。チャラ男だと思っていたがいいヤツなのかも知れない。

「いいか。この赤い点がたぶん星人。でここに青い点があるだろ。これが俺たち、星人の方はわかんないけど、頭に埋め込まれた爆弾に反応してんだろ」

そうだ。自分の頭も爆発する可能性があるということはそういうことだ。

「んじや。行くぞヤハギ」

「ヘイヘイ」

「俺たちが10分たつて戻つて」こなかつたらとりあえず外に出る

「おーい。お前カツコつけすぎ」

「バカ、何言つてんだ。行くぞ」

「ヘイヘイ」

2人はまた暗闇へと消えていった。西ホールに向かって。なかなかカツコいいじゃないか。

チキンなオイラはここで待ちますよ。と。レーダーをみつめる。異常はない。が、青い点2つは確実に赤い点に近づいている。

携帯を取り出して時計を見る。相変わらず圈外だ。

「10分か。意外と長いな」

バチバチ。電気が流れるような奇妙な音。

振り向くと例の中学生が立っていた。

「な・・・」

レーダーを見るそこには赤い点に向かう青い点がふたつ。そして自分がいる位置にも点が二つあるではないか。

「お前、いつのまに」

「消えてたんだよ。これに参加するときは、たいてい消えてから点数稼いだ方がいいからな。もつとも最近じゃ、姿を消しても見えるつつ星人も出てきてる」

「どうやって?」

「これだよ」

彼は自分のレーダー部分のあるボタンを押した。バチバチっという音とともに彼はまた姿を消してみせた。

「おまえと話がしたかつたんだ」

バチバチと音がなり、彼は姿を現した。

「(J)のレーダーはスースの機能も制御できるってわけだ。もつともそうやって取り外すとレーダーしか使い道ねえけどな」

「そういうのは後でいいよ。とにかくこの状況を説明してくれ」「あの2人がほとんど説明してくれたろ。基本、ガンツと一緒に死んだ人間が集められて星人退治をするってか」「その通り」

「ありえねえつつの」

「まあ、俺も最初そう思ったさ。でもこれが現実」

「そりゃ、お前は『ゴンツ』って言つてな」

「ああ、昔これに参加してたヤツが名づけたんだよ。ソイツもガントを知つてたからな。俺は・・・最初のゲームに参加した後に読んだよ」

「これは何回目なんだ」

「3、いや4回目かな。1週間前に秋葉原であつた大型家電量販店の爆破事件覚えてるか?」

「ああ、ガス爆発とかテロとか言われてたヤツな」

「アレも俺たちだ」

「マジかよ」

「相手はメイド星人。なかなか手強かつたが、なんとか倒した」「でも、どうして、お前しかいないんだ?今日集められたメンバーはお前以外は初めてつて感じだったけど」

「全滅した」

「えつ?」

「最後まで生き残っていたのは俺も含め4人だつた。でも転送されてきたのは俺ひとりだつたんだよ。何が起こつたのかわからない。ただ言えるのは、セカンドインパクトが近づいていることだ」

それなんてエヴァンゲリオン?とつっこみそうになつたが止めた。

「なんだ、それ?」

「詳しいことはわからぬ。が、ファーストインパクトは9・11

同時多発テロらしい」

「おいおい、あれもなんとか星人のせいだつていうのか?」

「だから詳しく述べ知らねえつて。全部前のメンバーからの受け売りだよ。ソイツらも死んだし、とにかく2000年以降の世界各国で起つている凶悪事件や未解決事件は『ゴンツ』が絡んでるつて話だ」

「ここから抜け出すには? やっぱり100点とればいいのか?」

「ああ、しかしガンツにはない特別メニューがある・・・ちょっと待て、おいレーダーみろ」

俺はレーダーを見た。赤い点と青い点が並んで近づいてくる。

「おい、どうなってんだ」

「知るかよ。アイツらが死のうが死ぬうが俺には関係ない」

「だったら、なんで俺の前に現れたんだよ」

「やっぱり覚えてないか。ケイちゃん」

「な、なんで俺の名前知ってるんだよ」

3つの点はどんどん近づいていた。

第4話「バースデイ・プレゼント」

「ワカチヤンか？」

俺は思い出していた。やはり彼は中学生だった。俺の記憶では彼はひとつ年下だったから。

「ああ。そうだよ。ひさしひさしぶりだな。こっちに戻ってきていたんだな」

彼の名は南洋司みなみようじで小学生のとき家が近所でよく遊んでいたのだった。俺は小5で転校してしまい、それ以降連絡は取っていなかった。

「そうなんだよ。こっちの高校に通っている。親はまだ向こうにいるんだけどさ。ほんとひさしひさしぶりだよな。カワイイお姉さんは元気かい？えっとワカチヤンだっけ」

「まあ、元気にしてるよ。ケイちゃんの高校のミスに選ばれたり。そんなにカワイイか？って思うけどな」

「え。そつなん？」

俺の3つ上だつたワカジのお姉さんは当時中学生でおそれしくかわいかつた記憶がある。

もしかしたら、俺の初恋だつたかもしれない。

「なんで最初から言つてくれなかつたんだよ」

「まあ、ゴンヅでは死ぬか生きるかの世界だし。クールキャラでいかないと、やってけないところもある。実際、前のメンバー間でも馴

れ合にはなかつた。協力プレイはしてたけどな

「じゃあ、俺たちは協力してこいつを。とにかく今やるべきことねあの画面のおっさんを倒さなきゃいけないんだわ」

「まあな。協力するってのは考えておくよ」

「なんだよ。その冷たわ」

「こつちは戦いの中で、人間の汚さつヤツをイヤといつぱじみせつけられたから・・・おつともつすぐ近づいてくるハズだぜ」

俺は返す言葉も思い浮かばず、ヒガシカドヒヤハギが来るであらつ方向を見つめた。

人影が近づくのがわかつた。3つ。

「おーい。まだいるかあ。そういうやまだ名前聞いてなかつたなあ。

おーい」

「こゆー。名前はシロノだよー」

よつやく姿をしつかり確認できた。

「アイツだ・・・」

例の部屋の玉の画面でみたおっさんがゆつぐつ歩いていて、それを挟んで二人がつづてくる感じでこりりに向かつてくる。銃口はおっさんに向けているようだつた。

おっさんは異常に背が低く140センチぐらいしかない。しかも格好がチェックのジャケット、半ズボンであるで小学生だ。

「おーい。どうすりやいこんだよ。みつけたはいいんだけどさあ。こつやつていきなり動き出すし。銃で撃つちまつてもいいのかねえ。

つうか使い方わからんねえしわあ。あつ、お前、ビリでいたんだ？」

ヒガシカドも「さうらの様子に気がついたようだ。といつてもその距離はもうかなり近い。

そして止まつた。

「「トイツ知り合いでだつたんすよ。」」の世界にも詳しいみたいで

「余計なこと言つなよ」

「えつ」

「俺は消えるぜ」

「ちょっと待てよ、ミウちゃん」

「じゃあな。まあ、銃の使い方は教えておいてやるよ。ダイヤルは1にしておけ。モーターを覗いて、ひとつトリガーをひけばロックオンされる。あとは両方ひけば攻撃できるよ」

「なあ、助けてくれよ」

「助ける?まだ危機的状況じやあ、ないだろ」

「おい!」

バチバチといつ音と共にミウジは消えた。

「消えたか。なんなんだよトイツは?」

ヤハギは銃をおっせんに向けたまま聞いた。

「何回かこいついう状況で戦つてるみたいですね」

俺は近づいていった。

「おい、気をつけろよスースないんだから」

「そう、そのスースで消えられるみたいですね」

「せつを試したよ。俺はできなかつたけど」

ヒガシカドが言った。

「すんません。戻します」

俺はレーダーを返した。ヒガシカドはそれを袖にあるコードに繋いだ。

「さあてどうするか」

「銃の使い方聞きました。ダイヤルを1にじゅうて」

「聞こえてたよ。ほぼガンツと一緒にだ」

「そ、そうすか。で。撃つんすか」

「どうするかなあ」

「で、でも「イツ変だけどやつぱり人間じゃないんすかね。どうみても、その宇宙人には・・・」

「宇宙人かどうかはわからないか人間じゃないのは確かだ」
ヤハギが言った。

「え？」

「お前も銃持つてだる。モニターで覗いてみろ」

俺はおっさんに銃を向けた。結果3人で囮んだ形となつた。

「これって・・・」

モニターにはおっさんの内部らしき映像が映し出されていた。そこには骨や臓器の姿はなく、明らかに機械的なもの・・・携帯電話の内部構造のように、「ま」とした部品、チップが見えた。

「ロボットですか？」

「まあな」

「もう撃つしかねえべ。なあ、少年？」
ヒガシカドが言った。

少年？

「おー。バカにしてんのか？お前らの勝手にしりよ。今回はお前ら
に点数をくれてやる」

ほんの数メートル先で、コウジの声がした。

「へいへい」

ヤハギが答える。

「やつぱりすぐそばで見てやがったか」

「どうするんすか」

「もつ撃つまおうぜ」

「早くロックオンしろよ」

「お前がやれよ」

「ギ・・ギギ・・・ゴ・・・・ガ・・・・ゴ」

突然、おっさんしゃべり始めた。

「コノ・・・・・ワルモノメ・・・・・タイジシテクレル」

「な、なんだ」

ポケットに手を入れる、おっさん。

途端にギュイーンギュイーンと、なにかエネルギーが溜まるような音がした。

「なんだなんだ」

「まさか」

パン。少し乾いた音がして、おっさんの頭がはじけた。倒れこむおっさん。

「おい、お前にいつの間に！」

「お、俺じゃねえよ。お前だろ」

「違う」

2人が一斉にこちらを見た。

「いやいや俺なわけないっす」

「俺だよ俺」

三ウジの声が聞こえた。

「なんだよ。点数くれんじやなかつたのか」

ヒガシカドが口を尖らせた。

「あんまつモタモタしてつからせ。せやいじくならないウチに

「おいおい。なんか、おかげでややこしことになりそつだ。少

年

ヒガシカドはおっさんを見下ろして言った。

倒れこんだおっさんは何やらコントローラーのようなものを持っている。

ひとつだけあるスイッチが押されていた。

そしておっさんの頭は吹つとんでいたものの、口は残っていた。

その口がパクパクしている。そして言った。

「ど、とらんす・ふあ～む」

「おい、あれみろよ!」

ヤハギが指差した。

振り返ると、ノッサンJ-T-Rのヘッドライトが光った。

瞬間、大きな音をたててJ-T-Rは巨大ロボに変形していた。

「マジかよ・・・」

やつぱりこればっかりだ。

「全然ややこしくないぜ。アイツを倒せばもつと点数は増える」

ヨウジが言った。瞬間。

巨大ロボットの右足が大きく前に出てヒガシカドを蹴り上げた。

「ぐはあ」

数メートル先の自動車にたたきつけられる。

「大丈夫すかあ」

俺は叫んだ。ガチャンガチャン。大きな音を立てながらロボットはヤハギに近づいた。

「巨大ロボ誕生ってわけね」

ヤハギは皮肉を込めて言った。こういう状況で言えるとは。あんたはハリウッド映画の主役か。

「くつそお」

ヒガシカドが起き上がる。スーツのおかげで助かったようだ。マジでスゴイな。あれは。

「油断したぜえ。いきますか、博士」

「助手よ。アイツらを壊すことができるのは私たちだけだ」

だからこれはハリウッド映画かつての。

ヤハギに向かつていつたロボットは方向転換をして、ちょうど俺の真正面にきた。

銃を構えていたヤハギは肩透かしをくらつて戸惑っていたがすぐに俺の方をみて言った。

「おまえ、スーツ着てねえんだからー早く逃げるー！」

そういうことだ。自分があのケリをくらつたら確実に死ぬ。ついさっきぶつかったハズのトラックを思い出していた。早く逃げたかったが体が動かない。

「ショ・・・・・ショタロサン・・・コワシ・・・タ・・・ダレ・・・

」

「おいおい。しゃべったよ」

「どうする」

「とりあえず撃つべ」

「早く逃げろ！」

いろんな声が聞こえてきたが。もうロボットの足は目前。大きく右足がまた蹴り出された。

俺は思わず身を伏せたが足は全く見当違いの方向を蹴っていた。

蹴った先でバチバチと音が鳴った。数メートル先の車のフロントガラスが割れたのと同時に、ヨウジが姿を現した。

「ヨウちゃん、助けてくれたのか？」

「見ててわかつたろ、ヤツは確実に俺を狙つてた。クソ。やつぱ見えてるな」

「おーい。少年。これでもう協力せざるを得ないだろ」
ヒガシカドが言った。

「じょうがねえなあ。プランBだ」

おいおいヨウジまでハリウッド映画コンテストに乗つかるか。

「で。どうなんだよ」

「とりあえず、俺とあんただちスーシ組は接近戦で足を狙え。ケイちゃんは早く離れて」

パン、パン。音がした。ロボットの足が碎ける。が、まだ立てるし、動けるようだ。

「とっくに足は狙つてゐるぜ。少年。さあ、じつするへ」

ヤハギが得意そうに言った。ロボットは振り返り、ヒガシカドヒヤハギの方へ向かい始めた。

「あんたたちなかなかやるな。ケイちゃん！離れて・・・銃のダイヤルを2してくれ！そしたら、遠くからでも狙える

「わ、わかった。足でいいんだな」

「違う」

「え？」

「足が狙えるならそれでもいいけど動きが早過ぎる。遠くからなじたぶん上半身の方がロックしやすい」

「や、そつか

俺は走り出した。いつの間にか自分も戦闘に加わっている。

やるしかないのか。俺。

第5話「ザ・ゴースト」

俺は数十メートル走った。振り返るとロボットは暴れまくっているが、3人はチョコマカと動き回り、翻弄している。

例の「パン」という音で足の装甲が壊れた。向こうでも確實に攻撃してくれているようだ。

俺は銃を向けてモニターを見た。だめだ。何も映らない。距離が遠すぎるので。

「やついや、ダイヤルを2つていってたな

俺は横にあるダイヤルを回して矢印を2に合わせる。

ガシャンガシャンと音がして銃身が伸びて、銃が変形した。

「いつもトランス・フォームってわけね

なにやらスコープのようなものが出でていたので俺はライフルのように構えて覗いてみた。

「わあ

見えた。

「これで狙えるってわけね

言わされた通り上半身を狙おうとするがそれでも動きが早い。しかし

ながら的にデカイのでなんとかロックオンできた。あとはトリガーを2つ引くだけだ。ギュイーン、ギュイーンと音がした。

数秒後。パンと音がしてロボットの胸部、車で言ひとフロントガラスが割れた。

さつきと一緒に、弾もレーザーも出ないが、ロックオンしてトリガーをひけば攻撃ができるらしい。いったいどんな構造なんだ？
しかし駄目だ。あんなところをチヨコマカと撃つても倒せない。

「頭か・・・・」

3人も距離を置き始めた。さすがに限界らしい。足はかなり攻撃されており機械部分がむき出しになっていた。

「ケイちゃん、どんどん攻撃してくれ、こっちはもう少しだ。なかなか倒れないけど・・・しゃあない。ダイヤルを3に合わせてみてくれ！」

肩で息をしだした2人に呼びかける。

「おいおい。こっちは攻撃よけながらなんだからよ。ケイちゃん、頼むよ」

ヤハギが叫んだ。あんたはケイちゃんつて呼ばなくていよいよ・・・。

「わかつてますよ」

といいつつも俺はまだフロントガラスを少し割つただけだ。1発目以降なかなかロックオンできない。いやロックオンしても見当違いの場所でロボットの向こう側の壁や車を壊していた。

3人の銃が変形していた。銃身が短く団太くなっている。

「いいかあ。このモードは威力が上がるが、連射ができない。一度撃つと5分は撃てない」

「マジかよ」

「確實に、ロックオンしろよ。一度でおそらく足はふっとばせるはずだ」

「最初からコレにしどきやよかつただろ！」

「反動がスゴイんだよー。ロックオンしたら距離を置いてトリガーだ」「少年よ！年下だろー！さつきから思つてたけど、タメグチはよくねえなあ」

「今、そういう状況じゃねえだろ！あんたらも俺をさつきから少年、少年つて。早くロックオンしろよー！」

「もうとっくにじてるつづーの」

「おーれも」

「早く言えよ。距離置くぞー！」

「わあつたよ」

3人が散り散りに3つに分かれた。

「マ・・・テ・・・・オマ・・・・オマエラ・・・タオス」

ロボットはガシャン、ガシャンとヒガシカドを追いかけ始めた。

「くつモ。トリガーリングだお」

「とつぐにひいてるぞ」

他の2人が叫ぶ。

「今度は俺が置いてけぼりかあよお」

ギュイーン、ギュイーンと銃が唸り始めた。

ヒガシカドは思いつきり走っていた。追いつこうとするロボット。手が伸びて、ヒガシカドを掴もつとした瞬間。

「ボン」今までより確実に大きな音がした。

まわりにあつた車も吹っ飛び、ヤハギと、ヨウジは吹き飛ばされた。

ロボットの足が両方吹っ飛んだ。ガシャーン。大きな音を立ててロボットは崩れ落ちた。

ヒガシカドは・・・すでにロボットの手に体ごとつかまれた後だつた。

「やつべ。おい」

「一ギ・・・・一ギ・・・リ・・・ツブ・・・シテヤル」

「おい。どうすんだよ」

ヤハギが叫んだ。

「しゃあねえなあ」

ヨウジが動こうとしたとき、ロボットの頭が吹っ飛んだ。途端にロボットは動かなくなる。

「た、助かったのか」

「スーツ着てるならなんとか抜けられるだろ」

「大丈夫すか」

俺は駆け寄った。

「おまえかよ」

ヒガシカドは力を入れてロボットの手から抜け出そうとしていた。

「ええ。なんとか頭をロツクオンできまいした」

俺はロボットの両足が吹っ飛んだ瞬間、動きが止まったのを見逃さなかつた。

「これで終わりかな？」

これまた近づいてきた矢作がヨウジに訊ねる。

「まだ、転送が始まらない。それに・・・」

「それに?」ようやく手から抜け出したヒガシカドが今度は言った。

「俺の経験上、星人がロボットなのはあり得ない。あれはダミーなはずだ。本体はどこかにいる」

「マジかよ・・・めんどくせえな

「とにかく倒しゃいいんだな」

「ああ、でも、あのおっさんを倒しても油断するなよ。前回メイド星人を倒した瞬間、明らかに星人のヲタクどもがわんさか出てきたんだから」

「どっちにしろ、あれがラスボスじゃねえのかよ」

ヤハギは倒れているロボット・・・もとはJ-T-Rだったのだが・・・をみつめた。

「でもここは変形しそうな車がたくさんあるぜ」

ヒガシカドが冷静に言った。

「おーおー。」JINの車が全部変形するつてか？」

「まさか」

「おーい」

中央ホール入り口から声がした。サラリーマンとおじいちゃん、そしてハリーポッタの3人が走ってきた。かなり焦つているようだ。

「なんだなんだ。あそこにいろいろつたる」

駆け寄る3人にヤハギが声をかける。

「そ、それが、なんだこれ」

サラリーマンは傍らに倒れいてるロボットの残骸をみつめた。

「俺たちが倒したんだぜ。すげえだろ」

「どうしたんだ、いつたい」

ヨウジが会話を続けさせた。

「それが急に・・・ゾンビが・・・」

「ゾンビ?」

「ゾンビ?」

「最初は一般人だと思つたんだよ。でもみかけた人たちは僕たちに気がつかないし」

「まあ、そういうもんだよ、でも、秋葉原では・・・まあいい。それで?」

「ゆっくり近づいてきて、あの、おばさんに噛み付いて・・・。どんどんゾンビが集まってきてあのカップルもいきなりやられて・・・。みづから逃げてきたんだ」

「ソイツらは雑魚キャラなのか?」

「俺はヨウジに聞いた。」

「たぶん違う。前回の秋葉原にも現れた謎キャラだよ。俺は見てないが、転送が始まる直前、他のメンバーが遭遇したらしい」

「見えなかつたつて・・・」

「通信で聞いてたんだ。最後にゾンビが来た。って言ってた」「通信?」

「ほらこのレーダーだよ。これには通信機能もついている。ん?」

レーダーを見つめたヨウジが何かに気が付いた。

「これ見てくれ

「ん?」

「東ホールに反応がある。ほら赤い点」

「ほんとだ。さっきまでなかつたぞ」

「おそらく、これは星人というよりロボットに反応しているんだろう。さっきJ - Rがロボットに変形した後も赤く反応してたのを覚えている」

「てつことは。まだロボットが?」

「その近くに本体がいる可能性もあるな」

俺はある予感がしていた。なぜそんな予感がしたのかはわからない。だがどうしても確かめてみたくなった。近くのブースに行って東京スーパー カーショーのパンフレットを見た。

やつぱり。

「あん? どうしたんだ。ケイちゃん」

ヒガシカドが言った。

「いや、シロノって呼んでくださいよ」

「わりい。でシロノ。どうしたんだ?」

「これみてください」

俺は東ホールの展示物がなにかを見せた。

「なんだよ。これがどうかしたのか」

「いいすか、東ホールは商用車展示つてなってます。つてことはトラックとかなんやら置いてあるんすよ。ＪＴ－Ｒはトランス・フォームつて確かにいいました」

「おい、まさか」

「つてことはああいう展開か？ヤツは味方じやないのか？」
ヤハギも加わった。

ヨウジも察したようだ。

「コンボイ……」

4人が同時に呴いた。サラリーマンはキョトンとしている。
おいおい。あんたはガツツリその世代だる。

すさまじい honjin 音が聞こえてきた。レーダーを見るまでもなく
こちらに近づいている。

「とにかく別れて逃げよつ。俺たちがなんとかするから！ケイちゃんは3人を連れてとにかく逃げるんだ」

「おいおい。俺たちつてやっぱり俺たち2人のこと？」

ヤハギが迷惑そうに言った。

「当たり前だろ！あんたたちはなかなか戦いのセンスがある。頼りにしてるよ」

「だったら考え方ある」

ヤハギは中央ホールのもつひとつの中口へ駆け出した。

「とにかく逃げないと」

俺はサウカーマンと、おじこちゃん、そして愛しのハコノセさんをみつめた。

必ず守る。

と心で呟く。

「だ、大丈夫かな。あの口外へ出たみたいだ。まだゾンビがいるかもしれない・・・」

「とにかく西ホールへ向かおう」

「君は戦えるのかい？」

サラリーマン俺の銃を見つめた。

「なんとかね。でもあの白にヤツ着てないからあんまり・・・」

「いや、僕にも考えがある。とにかく西ホールへ向かおう」

わざわざ俺が言つたじやん。

「い、いつたい何と戦つつもりなんだ」

おじこちゃんがようやく口を開いた。

「あそこにあるんだ、もう一箇の大口ボットが出てくわ」

エンジン音はもうすぐやうだ。

中央ホールに「変形前」の赤いトレーラーが突っ込んできた。

「はやくケイちゃん！」

ヨウジとヒガシカドが銃を構えていた。

「了解！」俺は走り出していた、サラコーマン、「おじこひめん、ハリコさんその後を追つた。向かうは西ホール。

「とひんす・ふお～む」

声がした。

振り返ると赤いトレーラーは「例の」ロボットに変形していた。

「あれ、みたことある。最近、映画で
ハリコさんが振り返りながら叫んだ。

「とひんすー走つてー！」

やっと口を開いたヒロインは俺はさつまつしかなかつた。

第6話「バーサーカー」

「勝算はあるんでしょう?」

走りながら俺はサラリーマンに声をかけた。

「勝算といつか……とにかくメカに対抗するのはメカ。でしょ」「メカつて」

サラリーマンはあるブースで立ち止まった。

「メツオカ」と書いてある。

真ん中にはさきほどの「T・Rよりも流線型で黒光りしているスポーツカー」があつた。

「なにこれ。かっこいい」

「わが社自慢の『コンセプトカー』『カマイタチ』だよ」「わが社つて」

「そう。僕はメツオカ自動車に勤務しているんだ。コイツならあのロボに対抗できる。いや対抗してみせる」

「動くの?」

「ああ、まかせておいてくれ、俺はコンピューター制御部門なんだけど、コイツにはスゴイコンピューターが組み込まれているんだよ。とりあえず。開けなきゃな」

サラリーマンはドアについているプレートに人差し指を置いた。ガチャン。ロックが解除された。

「よかつた。まだ俺のは登録されていたみたいだな」

「さあ、指紋認識システムに登録する。

「さあ、助手席に乗つて」

俺を促す。

「あの、俺はいいんですけど、彼女たちは・・・」
言いながら俺は振り返った。

まだ肩で息をしているおじいちゃんにハリコさんが寄り添っている。

「あ、適当に隠れてて
おいおい。ずいぶん冷たいな。

「大丈夫。こっちにはこないから。つかこさせねえから
俺はきわめて普通を心がけて言った。

「気をつけて・・・」
はい。がんばります。

俺は助手席に向かった。

すでにサラリーマンは運転席に座り、なにやらハンドルの横のモニターのタッチパネルを押していた。

「カーナビすか」

「なに呑気なこと言つてんだよ。よし。これで起動だ」

ブーンという音とともに車内の様々なところが点灯した。車とい
うより飛行機のコックピットのようだった。

「おはよう。マイケル。調子はどうだい」

突然、声がした。エアコンの送風口だと想っていたといひがまゆがいひが

らスピーカーのよつだつた。

「絶好調。これから、過酷なドライブになりそうだけどな」「望むところです」車が、答えた。

「なな、なんすか」

「どうだい。まだかなりの実験段階だから公表してないけど、この車はいわゆるAI搭載なんだ」

「マイケルつて・・・」

「知らねえ？ナイトライダー。行くぞキット」

「はい、マイケル」

車は走りだした。

「とにかくこの車で突っ込む。君は銃でじいでもいいから狙うんだ」

「それが作戦すか？なんておおぞっぽな

「コイツの機動力があれば、田兵戦よりマシなはずだ」

車はまっすぐ中央ホールへ向かつ。

ヒガシカドとヨウジが「コンボイ」の周りでチョコマカと悪戦苦闘していた。

「キット、アイツの足元に突っ込むぞ」

「なんですか？アレは」

「俺にもわかんないが・・・お前ならやれるハズだ」

「あんな姿にはなれませんが・・・なんとか」

俺はその会話をぼぼキョトンとして聞いていた。

「ほら、はやく」

サラリーマンに促され、俺は銃を構えた。

「キット、オープンカーモードだ」

「了解しました」

ウイーンといつ音とともに車の屋根が開いた。

「ね、これ、サンルーフとかないの？無防備過ぎじゃね？」

「こっちのほうが狙い安いだろ！」

ハイハイ。俺は銃のダイヤルを3に合わせた。

「いつちょいきますか」

ヒガシカドとコウジはこちらに『気がついていた。コンボイは動きを止めこちらを見据えている。

カマイタチはまっすぐ足元へと滑り込む。車は通り過ぎた。コンボイは動きを一マントは絶妙なドライビングテクで思いつきりローテーションをした。

「どうだ？」

「なんとかロックオンしましたけど」

ポン。という大きな音がして、コンボイの右手が破裂した。

「やつたぞ」

いや、頭狙つたんすけど……。

「さあ、反撃開始だ」

「ケイちゃん。なかなかやるな。細かいダメージは『えておいたから、もうすぐだぞ』

いつのまにかヒガシカドとコウジが車の側まできていた。

コンボイがガツガツこちらに向かってくる。

「危ない！」サラリーマンが叫んだ。

コンボイは左手を伸ばした。俺たちが乗っている車がつかまれる。激しい揺れに俺とサラリーマンは車から落ちた。

「キット」

サラリーマンは叫んだが、すぐに自分の身の危険を感じたか、走り出した。

俺は銃を構えて左手を狙う。が、モニターにはなにも映らない。

「ケイちゃん！逃げる、ダイヤル3を使つたろ！」

そうだった。5分は銃を使えないんだつけ。

エンジン音がした。音の方をみると、バイクがこちらに向かってくる。ヤハギだ。後ろにはヒガシカドが乗っている。銃を2つかまえている。

「こつの中に！」俺はとにかくその場を離れた。

「いぐぞー」

コンボイが振り返った。瞬間頭が破裂した。次に左手。カマイタチはそのまま落ちる。

走るバイクから一人が飛び降りた。そのままバイクはコンボイの足もとにつっこむ。

ガシャーン。大きな音を立てて、コンボイは倒れこんだ。

「やつたぜ」

ヒガシカドとヤハギが喜んでいる。俺は駆け寄った。

「いつの間に・・・」

「ああ、俺も驚いたよ。コイツがバイクでやってきたときには

「敷地内に停めてあつたんだよ。ショーユ用のやつは動かない可能性があるからな。エンジンかけるのに手間取つたけど。間に合つてよかつた」

「キット～」サラリーマンが泣きながら完全に壊れたカマイタチに駆け寄る。

「終わつたな。これで。さあて転送が始まるぜ」
ヒガシカドが言つた。

パン。コンボイの残骸の側にヨウジが立つていた。こちらを見る。

「詰めが甘いぜ。まだ星人が生きていた」「くそ。結局、お前が最後においしいとこ持つてくんだからな

「おつ転送が始まつた」

『気が付くと俺はまたあの部屋にいた。

第7話「レスト・タイム」

「結局、残つたのはコレだけか・・・」

ヒガシカドが部屋を見回して言った。

俺、ヒガシカド、ヤハギ、ヨウジ、ハリコさん、サラリーマン、おじいちゃん。

7人。5人が死んだ。という事実に実感が湧かない。

「まあ、これだけ残ればいい方だ。前回なんて全滅だぜ。まあ、メイド星人強かつたからな。今回は楽な方だ」

ヨウジがサラリと言ひ。

「さあて、点数が出るや」ヨウジが続けた。

皆、部屋の真ん中の玉「ゴンツ」に注目した。

またテレビ画面のようごモニターになつて文字が浮かぶ。

「ヨージ ヨシ、おいしことに持つていきすぎだよ。32点 トータル85点 残り15点で100点」

「ふー。ここまで長かったな。ケイちゃん、次のミッションで俺はたぶんおさらばだ」

ヨウジがニヤリと笑つた。

「片思い野郎 YOHO、なかなかがんばったね。18点 残り82点で100点」

「おー、これ誰だよ。片思い野郎って」

ヤハギが俺を見ながら言った。文字の横にはメンバーの似顔絵が浮かんでいる。それから察するに「片思い野郎」はやっぱり俺だ。つたぐ、どんな情報網だ。ハリコさんは見れない。

「まあ、まあ。若いつていいねえ。次は俺かな」

ヒガシカドが言った。

「チャラ男1 YOHO、まあまあ活躍10点 残り90点で100点」

「なんだよ。チャラ男1つて、しかもシロノより点数低いし」

おいおい。ダイレクトに名前出した。それにしても山ノ下。俺がつけたあだ名をなんで知ってるんだ。

「チャラ男2 YOHO、なかなか活躍11点 残り89点で100点」

「やつぱつ2番手かよ」ヤハギがぼやく。

「つか、なんで、俺より1点高いんだよ」

「バイク攻撃のおかげじゃね?」

サラリーマンは車で突っ込んだおかげが5点、ハリコさんは0点、

おじこひきさんものだった。

「わあい。コレで部屋から出られる。お疲れさん」

「おこ、ひきよ、待てよー。」

ヨウジはナツサと部屋を出た。俺たちも後に続く。隣り部屋の前までくると俺は言つた。

「あ、あのお疲れ様です。俺んち、実はココなんで・・・」

「マッジでー今度遊びによ

「つか、隣りかよ」

「たまり場にしようか

「作戦会議にはもつてここの場所かもな

ヒガシカドとヤハギが好き勝手に言つてこむ。それらを軽く流して部屋に戻ると、俺は布団にもぐつた。

「まさにバタンキューだな・・・」

翌朝、といつても3時間ぐらいしか寝てないのだが、ボーッとした頭のまま、学校へ行く準備をして部屋を出て・・・驚いた。イッキに目が覚めた。アパートの前で。ハリコさんが。待つていた。

「お、おはよございます」

「おはよ、まだ昨日の夜のことが信じられなくて・・・」

「そ、そりすよねえ。とりあえず、学校行きますか

俺は昨日の、ゴンジで得た知識をハリコさんに話しながら登校した。

「じゃあ、その漫画、ガンツを読めばいいのね？」

「はあ、俺もまだ読んでないんすけど、おそらくセーユーことつす

ねえ」

「ねえ、次の日曜、漫画喫茶につきあってくれない？」

「ああ、いいつすよ。ダイジョブです」

俺は内心、飛び上がるぐらい嬉しかったが、表に出さず、それでも軽い足取りになつているのを感じながら、定番のコレットでデートだよね。と思いながら、学校の門をくぐった。

「じゃあ、じこで」俺は笑顔で言つた。

「ねえ、明日も迎えに行つていい？ 家まで

「え？」

「なんだか、怖くて・・・」

「はい、大丈夫ですよ！ 同じ境遇の人人がソバにいると心強いつすもんね」

「ありがとう」

ゲタ箱に靴を入れて上履きに履き替えると、クラスメイトのオダ君が話しかけてきた。

「おい、お前」

「な、なんすか」

そう。オダ君とは特別仲がいいわけではないのだ。

「今、タドコロハリコだる、ミスフウリングルスの」

「そ、そただけど」

「なになに？ つきあつてんの？ じこでお知り合いになつたのよ」

もちろん、後をつけて、車に轢かれそうなところを助けて、いや助けられず轢かれて、隣りの部屋に転送されて・・・と説明もできず

に適当に口ひらかした。

その日、一日比較的、俺は注目されて、ヒガミや嫉妬、羨望いろいろ入り混じった視線を受けた。しかし、ハリコさんと登校できる。という事実を手に入れた俺にはどうでもいいことだった。

「しかも、下校まで一緒なんて」

「どうしたの？」

「いや、なんでもないつす。まさか、ゲタ箱でハリコさんが待ってるなんて思わなくて」

それから一週間が何事もなく無事に過ぎた。もちろん、俺とハリコさんは何の進展もなく、漫画喫茶でガンツを読んだぐらいだ。

そして。今日も、一緒に帰る。といつとき、校門の前の人人が立つているが見えた。

「あれ？ あの人・・・」

ハリコさんが先に気がついた。この前、あの部屋にいたおじいちゃんだ。

ハリコさんをみつけたおじいちゃんは、まあ、俺の方も軽く見て会釈したが。まっすぐに歩いてきた。

「君に、いや、やっぱり2人に話があるんだ」

「どうしたの？」

「なんすか？」

「今日の夜、ミッションがあるんだ。そこで、君、タドコロさん。

あんたが死ぬ」

何言つてんだ、この人。もうひとつ、非日常が迫ってきたようだ。

第8話「アライフ」

「一日を繰り返した? 今日を?」

「やうだ、私は今日、2回目の今日を送っている。確実に今夜この前みたいな・・・ミツショーン。それがある」

おじこちやんは言った。

「これは俺の部屋だった。ハリーハセーもいる。

とにかく話がしたいといつので、俺のアパートに来たのだ。

いつか、ハリーハセーを部屋に・・・なんて思ったのがこんな形で叶うとは・・・。おじこちやん付きかよ。まあいい。

「あのせ、いないだあんなことがあつたから、もう何聞いても驚かないけどさ、もう少し詳しく話してもらわないと」

「ああ、私にはさつきはつたように死者の助けを聞くと1日を繰り返してしまう能力がある。それで、私は1回ミツショーンに参加したんだ。今日」

「ちょ、それ、トゥルーハーリングじゃん。待てよ、じこさん、死んだ人の声聞いたってことは・・・」

「やう、僕は君の声を聞いたんだ、タドハロハコハセー」

おじこちやんはハリーハセーを見て言った。

「え？ 私・・・」

「マ、マジかよ・・・」

「君は星人に殺される。これだけは言つておいた。おとほなんとかしてくれ」

「ちよ、それ無責任じゃないすか、どうこう状況で。とかたあ」

「本来なら」

「本来？」

「せう。本来なら伝えるべきではないことだ。死ぬ運命にあるものを、助けてはいけない。人間は運命に従つべきなんだよ」

「じゃあ、なんで、私に教えてくれたんですか？」

「君のお兄さんだよ」

「え？」

「君のお兄さん、タダ「ロトオル君と君は私の愛した人の孫でもあつた。君のおばあちゃんとタダ「ロトキさん」のね」

「おばあちゃん・・・。2年前になくなつたわ。私が高一のとき

「お兄さんが助けたよな。1回」

「はい」

「お兄さんも同じ能力を持っていたんだよ」

「まさか」

「ねー、お兄さんは1回助けているんだ。君のおばあさんを。だが、私はやはつ運命を変えてはいけないと思つたんだ。そのときは・・・」

「

「あ、あの、ま、まさかその後、お、ばあちゃんを・・・」

話が見えない俺はただ聞くだけだった。ゴンツから読んでいる人は是非「トオル・コーリング」を読んでくれとだけ、読者の皆さんに言つておこう。

ピンポーン。

張り詰めた空気を裂くように、間の抜けた音がした。

誰か訪ねてきたのだ。

ガチャガチャとドアノブを揺らす音、ガチャリと鍵が開く。

合鍵を持つていて、今日来るはずの人といえば・・・。

「ケイちやーん。いるの?」

やはりオカンだ。掃除しにくるとか言つてたつけ。

いきなりドアを開けたオカソの目にまずはハリ「さんと俺が映った。

「あらあら、お邪魔だつたかしら。ケイちゃんつたらこんなカワイイ彼女・・・」

ふすまの影に隠れていたおじいさんに気がつき、目がテンになつていた。

無理もない。アパートの6畳の部屋に女子高生、おじいさん、男子高校生の俺。

いつたいどんなシチュエーションだよ。

「えっとね。これは・・・」

なんとかごまかそうとする俺・・・。

「わ、私はこれで失礼する・・・」

おじいさんはいきなり立ちあがつて、オカソに会釈した。

「え? ちよ、まだ、話終わつてない

「私も帰ります」

ハリコさんも立ち上がる。おいおい。

2人とも母親とすれ違ひ玄関に向かう。

オカソと俺は2人取り残された。

「えっとね・・・」

つたくなんて」まかせばいいんだよ。

だが、母親は深く追求することもなく、早速掃除の準備にとりかつていた。

助かるぜ、オカン。作者的にも。

部屋の掃除も終わり、オカンの手料理を食い、オカンは帰り、俺は部屋にひとりになった。

「今日、マジでニシジョンあんのかよ・・・。つうか俺は隣りの部屋に転送されるだけなんだよな」

そんな独り言を布団に寝つゝろがつてつぶやく、ハリコモにも聞きたいことがたくさんある。

「きたきた!」

背中にゾクゾクした感じ。初めてだか、たぶんこれが予兆だ。

案の定、ゆっくりと転送が始まった。

第9話「エフオナー・ザ・カーム」

「お。きたきた」

「待つてたよお。最後に来るんだもんないなあ

ヒガシカドヒヤハギの声だった。

寝そべつたまま転送されてきた俺は、ゆっくりと起き上がった。

ハリコさんがじゅらを見ていた。目が合ひ。俺は頷いた。

部屋の反対側では毎回、俺の部屋に来たジイサマが佇んでいた。

彼は本当に今日を繰り返しているのだろうか。

ミナミウジは相変わらず、我関せずで、白い球体、コンツをみつめていた。

あのサラリーマンもいた。近づいてくる。

「見たかい?ニュース。テロ扱いされるけど、結局は僕たちがやったことなんだよね・・・。会社でも大騒ぎでさ。なんせ、うちの商品も粉々だったから」

「はい、みましたよ

「また、今日もあんなことが起こるのかー」

「おや、へいべー・・・」

前回の「ガシカド」の話だ。あの後、コースで何度も「メクハリメツセでテロかー?」の見出しを何度も見た。

「とにかく、皆で生き残るべ。この間の件でわかつたひ。皆、とりあえず、スーシは着て銃は持つていってくれよ」

ヒガシカドが言った。

「おこおこ。お前につかから、そんなキャラになつたんだい?」

ヤハギがちやかす。

「うひせべ。とにかくやる! いやんなきや死ぬ! うひ! じだよ、なあ、うひちゃん!」

ヒガシカドはヨウジに話かけた。

「アホちゃんはやめてくれ。リーダー気取りさん」

「んだとー。」

ヒガシカドが、つかみかかわりとしたとわだ。ハリコさんが言った。

「ねえ、まだ誰か輸送されきてる?」

部屋のすみに足が浮き出でくるのがみえた。スネ、ふとももと順番に姿を現してきたが、明らかに子供だった。

「おこおこ、まさか新メンバーって」

すでに、5歳ぐらいの男の子が現れていた。

「あれ、こじるわい、パパは？ママは？」

無邪気な顔で問いかけてきた。

「この子も死んだのか」

ヤハギが言った。

「なあ、ボク、ここに来るまでのことを覚えているかい？」

「んーとね。ボクねひとりでお留守番してたの。パパ、ママ、帰つてくるのが遅いから、ベランダに出てねえ、お外見ようと思つてねー。それからーんーと。んーと」

「転落死か・・・」

ヒガシカドが苦い顔をした。

「なんだよ、ゴンツは新メンバーにこんな役立たず寄越しやがって。まだ、あんたらの方がマシだつたな」

ヨウジが言った。

「ちょっと。そういう言い方はないんじゃない？こないだは協力した中じゃーん」

ヤハギが茶化した感じで絡む。

「わかった。わかった。また協力してくれよ」

ヨウジがゲンナリした感じで答えた。

その瞬間、またあの音楽が流れ始めた。

「よし、ターゲットが出てくるぞ」

皆白い球体に注目する。子供はハリコやんにピッタリ寄り添っていた。子供ながら、一番信頼できると思つたのだろう。正解。

「ちあ、こんかいもいってきてください

三木星人

くちばせ…やあ、ボク、三木よろしくね

とくじょう…つおいお。なみが

「だつてさ

ヤハギがつぶやく。画面には恐ろしい顔をしたライオンみたいな猛獸が映し出されていた。

「ほり、シロノ。お前だけだぞ、スーツ着てないの」

ヒガシカドが言った。

「え？」

「まじり、転送が始まった」

俺は慌てて球体からスースイケース（片思い野郎と書かれたヤツだ）をとった。

「ヤベ、武器・・・」

転送は始まっていた。もつ景色は変わっていた。

「やつべえ。武器持つてこれなかつた・・・。」
「？」

そばにハリコさんが立っていた。手に銃を持っている。他には誰もない。

あとほかのどこの転送されたのか？

「ねえ、シロノ君。」
「マイハマだよね」

「わづ・・・だね。まさか2週連続で同じ場所に飛ばされるなんてね」

俺は日本一人氣のあるレジャーランド「江戸テスティーランド」のメインゲートを見つめて言った。

第10話「テス・マーチ」

「やつぱつ、」の中に星人がいるのかなあ・・・」

僕はハリコさんをみつめていった。

「うん・・・・」

なんだか、浮かない顔をしていた。

「あの、やつぱり、昼間の」と仮にしてます?」

「あのね。私、あの後、おじこさんからこう聞こいたので、お兄ちゃんにも」

「で、お兄さんはなんて?」

「やつと伏線回収したか。だけ」

「そ、そうですか」

「とにかく。今は」のミッションを頑張らなこと

「でも、あのじこはやんは今日、ハリコさんが」のミッションで・・・

・

「うん。大丈夫」

俺が守ります。と心の中でつぶやく。

「どうあえず、武器を……いや、やっぱりハリコを持っていた
ださい。使い方わかりますよね」

「うそ

僕らは「江戸デイストライーランド」のメインゲートへ、向かった。
ハリコをひねりで待つていて欲しかったが、前回のジンビの件
もある。どこが危険な場所かもわからない。

「シロノ君はここ来たことがある?.

「え、ええ。小学生の頃かな

いつか、彼女と。思つていたことは言わない。

しかし、まさかこんな形で女の子と向かいつま
メインゲートをくぐりぬける。

「どうあえず、どうします?他のヤツらはどう?あの子供ひと
りじゃないだろ?」

俺は手元のレーダーを見た。

「あー。いい反応してる。いいだって?」

ハリコさんもレーダーを見ている。

「うーん、風也さんはちみつ屋さんじゃないかな

「あ、詳しいんですね・・・」

「うそ、年1回は行くかな。今度一緒にいく?」

その言葉にドキリとしたが、僕はすぐに思った。

甘こ悪い出の前に苦こ悪い出が先にできてしまつんじゃないかな。

うーん。

だが、うーんはいつも答えるべきだ。

「行きましょう。2人で」

個人的には「生きましょう」と掛けているつもりだった。

「ありがとう」

そんな気持ちを察したのか、彼女はそう呟つた。

「どうあえず、この反応のところ行きますか。でもハリコさんを危険な目に合わせたくないんですよ。だから、しばらくうーんで様子を・・・」

「私は大丈夫。だから、うーんに行きましょう。私は行かないといけないの」

彼女はレーダーの赤い点をみつめていた。

赤い点は動いている。その先には青い点があつた。

第1-1話「トゥルイ・イズ・サムライ」

俺達は「風やんのまちみつ屋さん」というアラクションの前まで來ていた。

俺が来た小学生の頃にはなかつたアトラクションだった。

ハリコさんまでこじん足を進めてこぐ。

まるで、何か目的があるかのよう。

「あれ、子供の泣き声？」

俺は気がついた。わざの子供に違いない。

アラクションの横のトイレスの前にその子供はいた。

「ママー、パパー、ヒーヒーのー」と泣きじゅくっていた。

俺は子供にかけよつた。

「おー、大丈夫か？ パパとママに会わせてやつからな

もし俺が生きていたら。といつ言葉もひりふりつけない。

レーダーと見比べてみると、青い点はこの子供だつたのだ。

俺はレーダーをみつめた。赤い点が近づいている。それに向かう青い点がひとつ。

「あれ、この一つが俺との子供だ。つづいてはハリコさんだ。」

「おまえ、ひょっとトイレに隠れても」

そつ、子供に言つて、俺はレーダーを頼りに走り始めた。

だが、ハリコさんは肉眼ですべて確認できた。

数十メートルほど先で銃をかまえて何者かと対峙していた。

「あ、あれって、三木さん？」

江戸テスティーランドのメインキャラクター「三木さん」だ。

やつぱり、あの中身があるゴンシの画面に映つてた猛獣のヤツなんか？

とにかく、ハリコさんの所へ行かないと。

「ハリコさん」

「来なこやー」

ハリコさんは叫んでいた。

「な、な、ビ、ビ、うじて？」

「わー。三木さんだー」

あの子供が、僕を追い越して、ハリ「さんと三木さんの方へ駆けていった。

「ね、おー。つたぐみお。トイで隠れていろって・・・」

無防備に三木さんに対する子供の前にハリ「さんが立ちはだかった。

「危ないわ。近づかないで」

「でもお。三木さんだよ」

「いいから。私の後ろここで」

ハリ「さんと三木さんに銃を向けたまま、言つた。

銃を持たせたのは間違いだったのか？

そういえば、三木さんの風貌を描写していなかつたな。作者、いや、俺は思った。

まあ、アレだ。もちろんアレを想像してくれ。

「ねえ、ハリ「さんとあえず、そこから離れて・・・おー。えつと。子供。お前もこっち来いよ」

「やだー。おねえちゃんといふもん

つたく。

「ねえ、ハリ！」やさ

「ねえ。おのお兄ちゃんのとこ行つて」

「はあー」

しぶしぶ子供が近づいてくる。

三木さんは止まつたまま、微動だにしない。

「ねえ、ハリ！」やさ。僕がなんとかするか？」

「ダメ」

「へ？」

「あの、おじこさんから聞いたの」

「何を？」

「私、今回のミッションで死ぬの」

「だから、それは・・・」

「私が、その手を守るために死ぬんだって」

「えつ？」

「だから、『イシ』を倒さなきや」

「やあ、ボク、三木ようじくね」

三木さんがしゃべった。

そのとき、ゴロロンと着ぐるみの頭がとれた。

「やつぱり・・・おい子供ここにころよ」

ゆつくりとライオンの顔をした星人が出てきた。

着ぐるみが引き裂かれ、よつんぱいになる。

顔だけじゃない。

まさにライオンそのものの、猛獸が田の前にいた。

しかも、ライオンよりも大きいキバ、長い爪。

「ＴＶとかでしかあんまり見ないからそつ思つだけだろ」

言い聞かせるが、普通のライオンでさえ相手にできるかどうかが問題だ。

例のスースを着ているが。

普通の高校生が。

「やあ、ボク、三木さん。ようじくね」

ライオンはもう一度言った。

第1-2話「フリーダム・フリーダム」

俺はライオンに少し近づいた。

「ね。ハリコさん。ココは俺にまかせて。ハリコさんが死なないよう俺、がんばるから」

「ダメ。私がコイツを倒す」

「いや、でも」

ギュイーン、ギュイーンと音がした。

ライオン丸（といづあだ名こじた）サッと横に飛ぶ。

パンっと音がして、地面に穴があく。

なんと、ハリコさんはしつかりロックオンして攻撃していたのだ。

これなら、イケるかもしれない。

と思つた瞬間だった。

ライオン丸はもつ俺の田の前にいた。子供が必死にしがみつくる。

ヤベ。これは俺がヤバイ。

考えるまもなく、ライオン丸は急に立ち上がった。

「な、なんだ？」

驚いたことにヘンのあたりから角が出ている。ほんの数十センチ。

「な、な」

「危ない」

声が聞こえた瞬間目の前にはハリコさんが立っていた。

俺は小さな痛みを腹に感じた。

なにかがささつていて。さつきの角だ。

伸びたのか。

幸い、先端が少し当たつただけだ。

しかし、俺の目の前に立っていたハリコさんは・・・

ウソだ。

角はしっかりハリコさんの体をつらぬいていた。

「ハ、ハリコさん・・・」

バチバチっと音がして、ハリコさんに人影が現れた。

と、同時にその角は縮み始めていた。

「じ、じこさん・・・」

その人影はあのシイサマだつた。

ジイサマ、ハリコさんをあの角は貫いていたのだ。

「ま、守れなかつたのか・・・。でも、これでいいはずだ。すまない。私はここまでだ」

ジイサマと、ハリコさんが倒れこむ。

子供は後ろでまだ俺にしがみついている。怖いのだろう。震えている。

「クツソ」俺はライオン丸を睨みつけた。

2人にかけよりたかつたが、コイツを倒さねば。

と、思った瞬間、ライオン丸の頭は吹っ飛んだ。

ヤツは倒れた。

「おーい

ヒガシカドとヤハギとヨウジが駆けつけてくる。

「遅かつたか」

ヒガシカドが声をかけてきたが、俺は呆然としていた。

安堵感と悲壮感が交ざりあってわけがわからない。

「なんとか攻撃できたけど・・・2人は？」

「ダメだこのジイさんは死んでる」

ミウジが言つ。

「ハリコちゃんは意識がある！生きてるぞ！」

座つてハリコさんを抱きかかえていたヤハギが叫んだ。

3人が取り囲んだ。

俺はまだ動けない。

「ジイさんのおかげで急所から外れたみたいだ。ただ出血がひどい」
ヒガシカドがスーツの上半身だけ脱いで、さらにその下に着ていた
Tシャツを脱ぐ。

「これで、傷口押さえて。反対側も塞いだほうがいい

「まだ、間に合つかもしれない。早くミッションをクリアすれば・・・」

「つて、このライオン野郎を倒しただろ

「まだ転送が始まつてない。まだ、ラスボスがいるはずだ」

「クソ、ビニだ。レーダーは？」

「えっと。ここだ。ここビニだよ。場内の真ん中」

「あんみつ姫の城か・・・」

「おこ、青い点もある」

「ここにいないのは・・・あのローマンだな・・・」

「とにかく向かおつ

「おこ、ケイちゃんはここで、ハリコさんを見てひき戻もいる
し」

俺はよけいなく、我に返った。

「いや、俺も行く。ハリコさんを助けるなら人数が多い方がいいん
だろ」

「ダメだ。お前は彼女のソバにいろ！ほら、しつかり傷口を塞いで
！」

俺は言われるまま、しゃがみこんで、ハリコさんを抱きかかえた。

3人は走り出していた。

それから數十分後、転送が始まった。

第1-3話「アリバイ・ララバイ」

江戸デイステイーーランドのナッシュョンから早くも一ヶ月が過ぎようとしていた。

あの部屋に転送されたとき、生き残っていたのはヒガシカド、ヤハギ、コウチヤん、ハロセさん、がきんちよ、俺だつた。

つまり、ジイナムヒ、ワーマンが犠牲になつたわけだ。

コウチヤんは100点をとつて獲得。自由を選ぶ。記憶を消され、おやじく平穀無事に暮らしていくはずだ。

僕はと言へば、相変わらず、グータラに生きている。

ハリコセさんと登下校は一緒にもの、なんの進展もなし。

しかし、あれからミシションは一度も起きていない。

ヒガシカドとヤハギとはたまにメールで連絡を取り合つぐらうだ。

このまま、ただ時が流れていくだけではないのだろうか。なにも起じない。

そんな事を思つていた。

だが、現実はいつも甘くはなかつた。

今は授業中で、俺はおもしろくもない授業を受けていた。

ガラガラ。

突然、教室の扉が開く。

「誰だ。君は？ウチの生徒じゃないな」

教室中の注目を集めたヤツはまっすぐ、一いち方に向かってきていた。

「よ、ユウちゃん……ど、どうして」「…？」

そり、南洋司だったのだ。

「来てくれ、ケイちゃん」

「ちよ、ちょっと待つてくれよ。何？突然来てさあ」

「記憶が戻った。急に。クソ、こんなことなら、強い武器を選ぶべきだったな」

「へ？」

「始まる」

「何が？」

「セカンド・インパクト」

ガタン、イスが倒れるぐら^イ俺は思い切り立ち上がる。

「ど、どうしたシロノ、知り合いか？」

先生が声をかける。

「あ、ええ。まあ」

何かしら言ひ訳を考えていると、窓際の生徒がつぶやいた。

「なんだ、あれ、ほら、校庭にさ、人がわんさか・・・」

「うわ、なんかゾンビみてえ」

「なんかの撮影？」

「まさか・・・」

「な、始まつたろ。これが、セカンド・インパクト。最終ノンショ
ン。ゾンビ星人さ」

「スースは？ 武器は？」

「もちろん装備してる。ケイちゃんもだろ」

「ま、まあね」

俺は力バンから銃を取り出した。

「み、みんな、学校から離れた方がいい。えっと、避難。そう避難
してくれ！！」「俺は叫んだ。

「はあ？ 何言つてんの」

「何、その銃」

いろんな声が飛び交う。

「いーから、静かに、ちょっと先生、様子見てくるかい先生が、教室を出て行く。

「おこ、どうする?」

「ケイちゃん、避難とかしたといひで無理だぜ。おもろへ日本中がいや、世界中がこんな感じかも」

「じゃあ、どうすんだ?」

「とにかく闘おつ」

「ハリコセス!!ハリコセス!」に行かなきや。みんなにも連絡しないと

俺とコウジは廊下に出た。

廊下も、生徒たちで溢れかえっていた。

「みんな!!家に帰ったほうがいい。ゾンビ……が……

「ケイちゃん。無駄だ。ハリコセス!」

「あ、ああ」

俺とコウジは走り出していた……。

あ、あれ、ハリ「さん、さん・・ねん・・何組だっけ・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2224d/>

GONTZ -ゴンツ-

2010年10月14日19時11分発行